

Absence of occlusal support declined their activities of daily living in elderly people receiving home care

学位名	博士(歯学)
学位授与機関	日本歯科大学
学位授与年度	2015
学位授与番号	32667甲第1114号
URL	http://id.nii.ac.jp/1102/00000756/

在宅療養高齢者における咬合支持の喪失は ADL を低下させる

元開 早絵

論文内容の要旨

日常生活動作 (Activity of Daily Living: ADL) の維持は、在宅療養を継続するうえで欠かせない要素である。本研究は、要介護高齢者における咬合支持の喪失が ADL の変化に影響を与えることを明らかにするため、1 年間の追跡調査を行った。65 歳以上の在宅療養中の要介護高齢者 322 名(男性 93 名、女性 229 名、平均年齢 83.4 ± 7.9 歳)を対象とし、性別、年齢、ADL (Barthel Index: BI)、認知機能、基礎疾患、栄養状態、咬合支持の状態、嚥下機能を調べ、咬合支持と ADL との関連を検討し、以下の結果を得た。

- 1) 初年度の BI は、62.0 であり、1 年後には 56.6 に変化した。
- 2) 1 年後の ADL が維持あるいは改善した者は 152 名、低下した者は 170 名であった。
- 3) 義歯を含めた咬合支持がある者は 281 名、咬合支持がない者は 41 名であった。
- 4) ADL の変化と関連を示した項目は、咬合支持と認知機能であり、特に咬合支持の有無が強い関連を示した。
- 5) ADL の変化と咬合支持の有無が関連を示したのは、歩行とトイレ動作であった。

以上の結果より、要介護高齢者において、咬合支持は ADL に関することが示され、在宅療養を継続するために重要であることが推察された。

論文審査の要旨

本研究は、在宅療養高齢者を対象に追跡調査を行い、咬合支持が ADL に与える影響を検討したものである。その結果、咬合支持の喪失が ADL 低下を招く因子の一つであることが明らかとなった。この知見は、在宅療養高齢者の ADL 維持のため歯科のかかわりに重要な示唆を与えるものである。

以上は、歯学に寄与することが大きく、歯学 (博士) の学位に値するものと審査する。

主査 志賀 博

副査 新井 一仁

副査 五味 治徳

最終試験結果の要旨

元開早絵に対する最終試験は、主査 志賀 博教授、副査 新井 一仁教授、副査 五味 治徳教授によって、主論文を中心とする諸事項について口頭試問が行われ、優秀な成績で合格した。